

いとさん、 こいさん、 絵描きさん



女四人の会 (大正5年)
左から岡本更圖、吉岡(木谷)千種、島成園、松本華羊。
いずれも20代前半の4人は大阪から文展に入選し、西鶴の「好色五人女」をテーマにグループ展を開いた。

「女絵師女うたびとなど多く浪華は春も早く来るらし」(吉井勇、大正九年)―モダニズムの時代、大阪は、女性が文化人として盛んに活躍する街だった。島成園、木谷千種、生田花朝、そして大勢の若手…日本画で文展や帝展、院展に名を馳せる女性たちは「商都」を「文化芸術」の街へと変貌させつつあった。だが、戦争をへて時は流れ、地元大阪でもその栄華は忘れ去られてしまう。八十年の年月を越えて、今、彼女たちの輝きがよみがえる。



大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室 蔵

小川知子

大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室 学芸員

もともと大阪では江戸時代から教養豊かな女性たちが文人画家として活躍していた。明治以降も、関東で名を馳せた野口小籟(のぐちこさい)は大阪の難波出身だったし、南堀江には河邊青蘭(せいらん)が暮らしていた。そんな街に大正元年(一九一二)、二十歳の新人・島成園(しまなり)が文展にデビューして注目される。女性画家といえは京都の上村松園(じまのり)と東京の池田蕉園(いけだせうえん)が双璧をなしていた時代である。松園より十七歳年下の成園が登場し、京都・東京・大阪の三都に美人画の女性が三人いずれも画号に「園」を揃えたことで「三都三園」と称せられた。上村松園は孤高に画業をきわめ、池田蕉園は大正半ばに夭折した。対して、大阪では島成園に憧れて画家をめざす若い女性が多く育ち、大正から昭和初期にかけて比類のない活躍をみせた。

モダニズムの時代、若い女性たちは成園のように絵で自己を表現し、世に羽ばたくことを夢みた。商都大阪には裕福な家庭が多く、良家の夫人や令嬢(いとさん、こいさん)が稽古事として絵を学ぶ習慣もあった。貧しい家庭の子女も職業画家を志して地方から大阪に集い、画塾に通って文展、帝展、院展をめざした。

だが、当時の美術界は当然ながら男性中心で、女性が一人前に評価される機会は少ない。女が絵を描き、真に自立した画家になるのは困難な道で、結



大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室 蔵

島成園の画塾（大正後期）

生徒たちは互いにモデルをつとめ、
スケッチして人物画制作を学んだ。



しま せいえん
島成園
(1892～1970)
[無題]
大正7年(1918)

成園はうわべだけ美しい女性像を
越えて人間の内面表現に踏み込んで
描こうとした。顔に架空の痣を描
き加えて痣のある女の悲痛な心情
に迫ろうとする衝撃的な自画像。



大阪市立美術館 蔵

きたに ちくさ
木谷千種 (1895～1947)
[浄瑠璃船] 大正15年(1926)

千種は島成園とともに大阪の女性画家の先駆者として活躍し、画塾
「八千草会」で多くの後進を育てた。徳川末期を舞台に大川の川涼み
の情景を描いた本作は、失われた大阪情緒へのオマージュでもある。

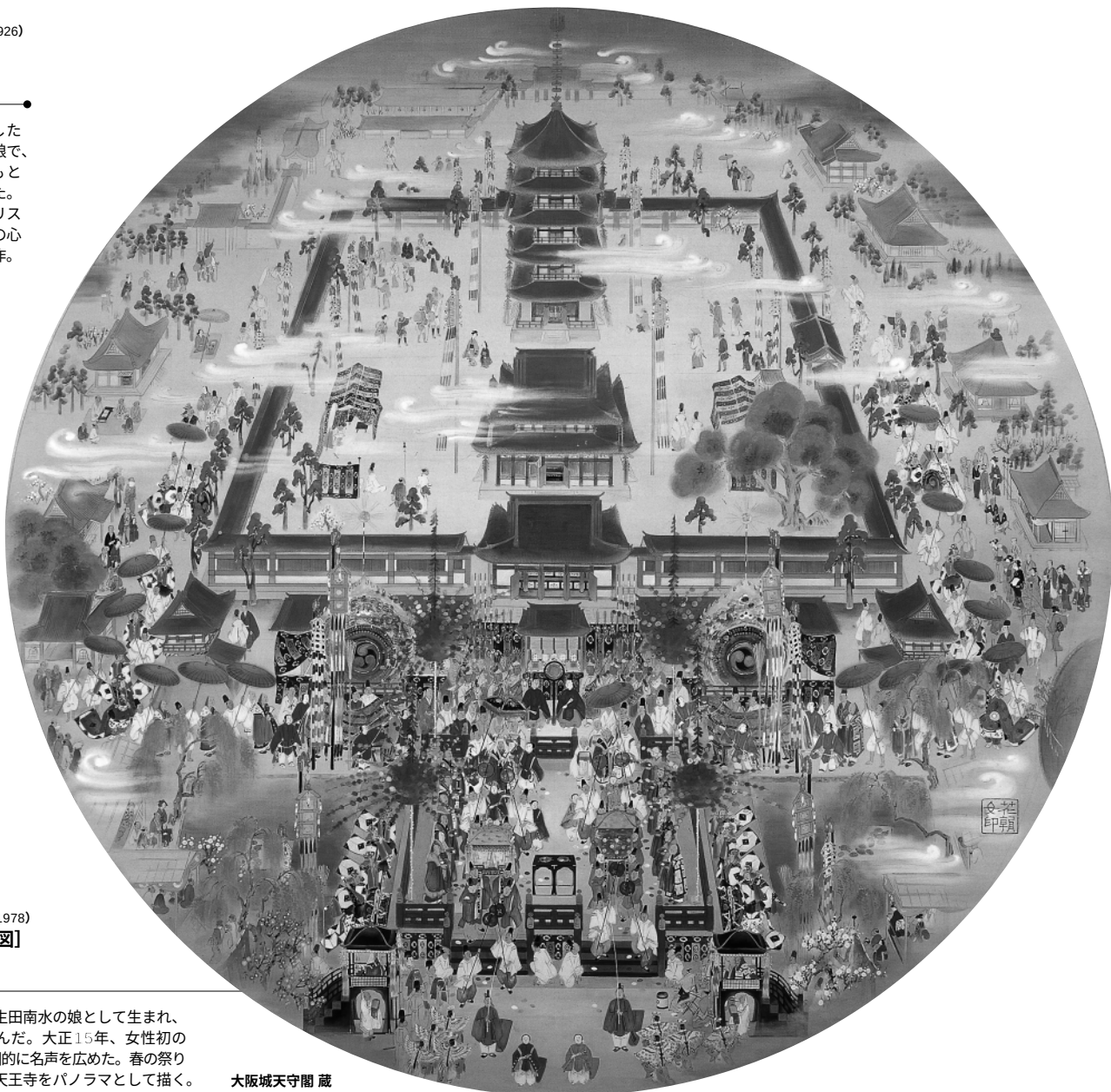
しま せいえん
島成園 (1892～1970)
[祭りのよそおい]
大正2年(1913)

大阪に女性画家ブームを
つくった成園は堺に生まれ、
町絵師の父と図案家だっ
た兄に絵を学んだ。21歳
で描いた本作は、夏祭り
に着飾った裕福な船場商
人の娘と貧しい女の子を
対比して描く社会的な視
点が新しい。2006年2月
に開かれた「島成園と浪華
の女性画家」展（大阪なん
ば高島屋）などで再評価
がすすめられている画家。

婚や出産によって挫折した女性も多か
った。そして彼女たちが生み出した佳
作の大半は、第二次大戦で大阪の街と
ともに焼け、散逸する。娘、妻、母と
して絵絹に向かい、心血を注いだ力作
は本当に失われたのだろうか。二十一
世紀を迎え、八十年前に大阪の文化芸
術を彩った女性画家たちの存在に再び
光が当てられることを願ってやまない。

みつゆ ちすず
三露千鈴 (1904~1926)
[殉教者の娘]
 大正15年 (1926)

22歳の若さで夭折した千鈴は裕福な商家の娘で、木谷千種の指導のもと優れた女性像を描いた。病弱な身を案じてキリスト教に入信した千鈴の心の自画像とされる大作。



いくた かちよう
生田花朝 (1889~1978)
[四天王寺聖霊会図]
 昭和2年 (1927)

花朝は大阪の文人・生田南水の娘として生まれ、菅橋彦に大和絵を学んだ。大正15年、女性初の帝展特選となり、全国的に名声を広めた。春の祭りに賑わう江戸期の四天王寺をパノラマとして描く。

大阪城天守閣 蔵



大阪市立近代美術館 (仮称) 建設準備室 蔵



はしもとはなの
橋本花乃 (1897~1983)
[七夕]
 昭和5~6年 (1930~31) 頃

花乃は北野恒富に学び、帝展などで活躍した女性。本作では右から左へ流れるように、七夕の笹飾りを楽しむ少女たちの情景が描かれる。

—失われた都市の記憶を求めて—

美術
都市

大阪

発見

第三回

よしおか み え
吉岡美枝
(1911~1999)

【店頭の初夏】

昭和14年(1939)

吉岡美枝ははじめ島成園に学び、やがて中村貞以に師事する。成園や千種は失われた徳川末期の風俗を好んで描いたが、美枝は洋装の現代女性を描いて新世代の息吹を感じさせる。



大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室 蔵

とおる こうらん
融紅鸞
(1905~1982)

【朝露】

昭和17年(1942)

「あんさん別れなはれ」の名フレーズで人生相談回答者として戦後人気を博した融紅鸞。矢野橋村に花鳥画を学び、帝展、日展などで活躍した実力派の女性画家でもあった。夏の朝に伸びゆくトウモロコシと可憐な朝顔を対照的に描いた佳作。



枚方市立御殿山美術センター 蔵



大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室 蔵



第4回大阪女流画家展(昭和12年6月 大阪三越屋上にて)
戦前期の大阪には女性の日本画家が数多く活躍し、毎年、女性だけによる公募展が開催された。